

日本語学習者の質の向上へ向けた動き

割石 俊介

<神田外国語大学が日本語教育の拠点を設置>

最近の日本・インドネシア関連ニュースで目を引いたものの一つが、神田外国語大学がインドネシアのアトマジャヤ大学に日本語教育を中心した交流拠点を開設した、というものです。アトマジャヤ大学はインドネシアの有名私立大学のひとつで、カトリック系ということもあり多くの中華系のインドネシア人が学んでいます。

学生向けの日本語教育にとどまらず、教員向けの日本語教授法、ビジネスマン向けの日本語教育も行う計画とのことです。

インドネシアにおいてビジネスを展開する上で言葉は大きな課題の一つですが、日本語学習者のレベルがあまり高くないのがビジネス環境としては悩ましいところで、こうした動きは大いに歓迎すべきと言えるでしょう。

<世界第二位の日本語学習者>

実は、インドネシアは世界第二位の日本語学習者を誇り、その数は75万人（2015年、国際橋交流基金調べ）にもものぼります。日本語学習者が多いのは、2006年に高校での第二外国語が必修になったのがきっかけと言われていました。その後、第二外国語は必修ではなくなりましたが、多くの高校で日本語教育が行われています。子供のころから日本のアニメや日本企業の製品が身の周りにあり身近な存在であるためか、日本語に興味をもつ生徒が多いようです。

<上級日本語人材のプレミアム>

日本語に関心をもっていただけるのは大変嬉しいですが、多くの人が「ちょっと、かじってみる」というレベルにとどまっている現状を、もう少しなんとかしたいところです。日本語能力試験の受験者数はインドネシアでは14,000人しかおらず、学習者の数から比べて受験者は非常に少なく、ベトナムの58,000人、タイの23,000人（各国における受験者数）と比べても低い水準です（2016年、国際交流基金調べ）。

仕事で使えるレベルは日本語能力検定3級以上とされますが、即戦力として必要な2級以上の保有者はインドネシアでは少なく、限られた頭数に多くの求人が寄せられます。職種・勤務地・職務経験にもよりますが、日本留学を終えたばかりの新卒でも800万ルピア（約6万円）、場合によっては1,000万ルピア（約7.4万円）といった水準になることがあり、一般人材より3～5割のプレミアム付で評価されます。インドネシアの労働市場は流動性が高いため、需給を反映した市場価格（給与）が形成されますが、このプレミアムは日本企業ならではのコストということでもあります。

現状ではインドネシアの日本語教師の殆どは日本語能力検定3～4級レベルとされていますが、日本語人材の裾野の拡大と質の向上を図るには、学生・教員・ビジネスマンの全てにトレーニングの機会を提供する、神田外国語大学のような事例が一層拡大することが望まれます。

<サポーター最後のご挨拶>

業務の都合により、今回を持ちまして最後の投稿となりました。ビジネスサポーターとしての活動は、広島出身の私にとって故郷との繋がりを感じられる貴重な機会でもありました。引き続き、ジャカルタにて日本とインドネシアの架け橋として活動して参りますのでよろしくお祈りいたします。未筆ながら、皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。